

手伝えることはありますか

神奈川県 厚木市立荻野中学校 3年

坂 碧人（さか あおと）

「俺はやればできる子だから。」

父は笑いながらそう言います。

三年前、父は仕事中の事故で怪我をしました。会社からの連絡を受け、母、弟、私で病院へ行くとそこには、ベッドに横たわり、一人涙を流す、右手を失くした父の姿がありました。初めての父の涙に私は、戸惑い、不安さえ覚えました。しかし、ふと冷静になった私は、「家族が障がいを負ったのだから、自分が身の回りの事を全てやってあげなければならない。それが最善である。」そのときは、そう思っていました。

それから、私は、積極的に父の手伝いをするように心がけました。お風呂の時に背中を洗う、ペットボトルのキャップを閉める、そして、靴ひもを結ぶ。大変だとは思いましたが、それ以上に、「自分は良い事をした、感謝されている。」という、幸福感がありました。

しかし、父と行動を共にすることに対して、最初は多少の抵抗がありました。なんといっても、隣りを歩いているのは右手の無い人なのです。義手で隠すといっても限界があります。シリコンでできているため、人の肌の質感と違いますし、なにしろ指が動かないため、一つ一つの動作が不自然になってしまうのです。ですから、父の手伝いをして極力手を使わせないことは、他の人に義手であることを気付かれないために必要なことで、私だけでなく、父のためでもある。そうとさえ思っていました。

ところが、これらの私の考えは、完全に間違えていると気付かされる出来事がありました。

ある日、家族で買い物をしていた時のことです。私は、父の靴ひもがほどけていることに気が付きました。そこで私は、いつもと同じように結ぼうとしました。が、しかし、予想もしていなかった言葉で父に断われました。

「俺はやればできる子だから。」

父は、そう笑って言いわけ、実際にやりとげました。どう結んだのかは分かりませんが、そこで私は気が付きました。今までの行動は良心ではなく、単なる押し付けだったのです。

そもそも、「やってあげなければ。」という考え自体が恩着せがましく、そこから得た幸福感など、ただの自己満足だったのです。確かに、助けられた父は楽で

はあったかもしれませんが。しかし、私達家族がいつでも近くに付いていられる訳はなく、父が一人でやらなければいけないこともたくさん出てくるのです。それに義手であることを隠そうとするのは、私が周りの目を気にしているだけであり、むしろ父の存在を否定してしまっていました。父には本当に申し訳ないことをしてしまったと今では反省し、二度としてはいけないと強く思いました。

しかし、確かに、「やればできる」父は、自ら様々なことに挑戦していました。その一つとして、「アンプティーサッカー」という障がい者スポーツをやっています。フットサルのようなルールで、足のないフィールドプレイヤーと手のないゴールキーパーによって行われます。そのスポーツを始めてから、父と私で過ごす時間が増えました。その時間とは、サッカーのトレーニングをする時間です。私もサッカーをやっているため、共通の部分があり、大切な時間となっています。

しかし、それ以上に父にとってプラスになっていると思うことは、アンプティーサッカーの仲間と、辛さや心身の痛みを分かちあえているということです。そのお陰か、父の表情が以前より明るくなり、怪我をする以前のような、明るい性格に戻りました。

先日食事に行ったときも、失った右手を通して、無邪気な小さな子供と触れ合っている姿を見て改めて、「偏見」というものをなくしていかなければならないと思いました。

父に関する体験を通して、私は障がいについてとても考えさせられました。「一切の偏見を持たず、相手の気持ちを考えて、できることには手出しをしない。」様々な体験をした結果、私はこのように考えました。これを守ることは、その人に生きる活力を与え、居場所を奪わずに済みます。「やってあげる」、ではなく、「手伝えることはありますか」、そう声をかけることが大切だと思います。

「俺はやればできる子だから。」その言葉の意味を重く受け止め、差別のない社会作りに私は少しでも貢献していきます。